

林屋辰三郎
上田正昭編

篠村史

旧京都府南桑田郡篠村、現亀岡市篠町とい
えば、山陰道を丹波へ越えてすぐ、歴史と伝
説に名高い大江山・老の坂のふもとであり、
足利高氏旗上げの地篠村八幡の所在地であ
り、新しくは京都府下でも最も激しく小作争
議が戦われて歴史上すこぶる興味をそそられ
るところである。この村史は、しかしそうし
た内容よりも前に、編纂の方針が極めてユニ
ークである。近時市区町村史の編纂は、プ
ーム的に盛行しつつあるが、町村合併を記念し
ての、いわば共通の歴史を持つとする意図
に出るものが多い。『篠村史』の編纂も同じ
く合併問題が契機となりながら、しかしこれ
とは全く逆に「新しい亀岡市篠町への門出の
ために、旧村の足跡を正確に記録・保存」す
ることを目的とし、しかも「決して篠村への
袂別という感傷の気分支配されず」「厳密
な科学的態度をもつて」「何の虚飾なしに村

の全貌を示すことにつとめ」(六頁)ている。
もとより旧篠村は歴史を通じて一つの自治体
であつたわけではないにしても、明治以来の
一世紀の歴史は、「篠村」を単位として展開
してきたのであり、この歴史を無視しては篠
村の現在はいわば吸取消合併であつてみれ
ば、篠村にあつた旧篠村の人々の心の糧と
してその歴史を総括しておくことは、まこと
に当を得た処置であつたといわなければなら
ない。

立命館大学教授林屋辰三郎氏、同講師上田
正昭氏を編者に、同衣笠安喜助手はじめ大学
院学生多数によつて執筆された本文は、こう
した本書の性格に最もふさわしい内容をもつ
ている。日本歴史の流れの中に、篠村の断片
史料をあてはめるよりはむしろ、篠村の史料
に即しての構成がとられている。従つて古代
中世は、歴史学上幾多の興味を抱かせながら
も比較的分量をおさえられ、代つて明治以降
の歴史が、質量ともに豊富である。市町村史
が、まゝ明治以前でうち切られるのには、も
とより種々の事情が存するではあろうが、そ
の地の人々の心の支えとしての意味は半減す

る。篠村史は、明治以降、資本主義の矛盾と
闘う村人の姿を前面に押し出し、さらに合併
の経緯をも歴史の一章として含んでいる。

とはいへ古い時代が簡略化されている訳で
はなく、史料の存する限り、幾多の新知見に
基づいて叙述されている。例えば中世篠村荘
に関する記述、近世村落の発達、保津川水運
の問題等々、多くの研究者にとつて垂涎の問
題を展開している。

以上『篠村史』は、近時の市町村史編纂の
ブームの中で、ユニークな存在として撫摩な
紹介をしたのであるが、ただ惜しむらくは「史
料集」の刊行がないことである。本書編纂の
由来からしても、「史料集」を編纂してはじ
めて首尾完結するといえるし、本文の内容が
歴史学上有意義であればあるだけ、その史料
をも併せて学界に公開されることが、待望さ
れるのである。関係各位の御一考をわずらわ
しいと思う。(A5判五〇七頁 亀岡市役
所篠支所内 篠村史編纂委員会発行 頒価
一、〇〇〇円)

(熱田 公)